パスカルの『パンセ』の神学思想

—— 聖書解釈とキリスト論 ——

森　川　　甫

1．聖書解釈

起自然的な聖書を，ルネッサンスを経験した新しい世界像に対してどのように適合させるか，ヤーウェーと本体論的に証明されたデカルトの神を，新しい世界にどのように調和させるかという問題[1]は，とりもなおさず，聖書解釈の問題である。この問題は十七世紀フランスの作家，思想家にとって避けることのできない根本問題であった。パスカル[2]に関しても例外ではなかった。自然界においても，人間の世界においても，彼は絶対的な確実性を得ることができなかったが，たゞ，神の世界においてのみ，それが与えられた。従って，神の意志を知ること，即ち，啓示を知ることが必須となってくる。神の意志は啓示の書，即ち，聖書を通して得られるが故に，ここに聖書解釈が必要となってくる。『パンセ』[3]においても，聖書解釈は核心的な問題となっている。その聖書解釈の特色をこの小論において述べたい。

× × ×

パスカルの聖書解釈の特色として，次の三点を指摘できると思う。1）実証的であること，2）論理的であること，3）福音的であること，である。以下，これらについて述べよう。

1）実証的であること

1° まず第一に，パスカルは聖書を解釈するに当って，正しい聖書本文を確立するために，できるだけ聖書原典によろうとする。即ち，パスカル自ら，新約聖書の原典であるギリシァ語聖書からの翻訳を試み，その上，エラスムスの翻訳を参照した。ヘブル語旧約聖書に関して述べると，ヘブル語はギリシァ語ほどできなかったので，ヴァタービル Vatable の『ポリグロッタ』*Polyglotta* を使用し，更に，ヘブル語文法に精通していた十三世紀の，レーモン・マルタン Raymond Martin の『信仰の剣』*Pugio Fidei* を利用して，より正確な文字的意味を得ようとした。このようにパスカルは，聖書解釈をするに当って正しく文字的意味を解読するため，原典によったり，或いは，原典によれない場合には，原典研究の成果を利用した。[4]ここに，彼の実証的な特色があらわれていると思う。

2° 1° における如く，正しい聖書本文を得るよう努めた後に，聖書における個々の事実に基いて解釈を下している。即ち，聖書的事実を歴史的事実とみなし，それに基いて解釈する。例えば，第22章「モーセの証拠」[5]における創造とノアの大洪水の記事の真憑性を論じている箇所を見よう。

この真憑性を述べるに当って，パスカルは次の如き具体的事実に立脚している。

(イ) アダム，レメク，セム，ヤコブ等，ユダヤ民族の族長たちが長命であったこと。[6]

(ロ) 彼らは彼らの先祖たちと共に生活し，共に語り合ったこと。[7]

(ハ) 先祖の物語以外に主要な話題がなかったこと。[8]

(イ) パスカルによれば，真理は世代の多数のゆえに誤って伝達され易い。換言すれば，人から人へ伝わる回数が多いほど真理は変化してゆく。然るに，族長たちは長命であったから，彼らの世代の数は少い。それ故に，天地創造と大洪水の記事は正しいと彼は云う。

族長たちが長命であったことに関して，パスカルは次のように述べている。「セムはレメクを見，レメクはアダムを見たが，そのセムはまたヤコブを見，ヤコブは，モーセを見た人たちを見た。」[9]この一節は，族長の長命に関する創世記の記述

に基いている。[10] それによれば，アダムの誕生からレメクの誕生までは874年で，アダムは930才まで生きたから，アダムとレメクは会っており，また，レメクの誕生からセムの誕生までは682年で，レメクは777才まで生きたと云われるから，レメクとセムは会っているわけである。同様に，セムはヤコブと，ヤコブはモーセを見た人々と会っている。このように族長たちは長命であったので，世代の数は極めて少い。因みに，旧約聖書の記述から計算すれば，天地創造から大洪水までの年数は1656年であるが，世代数はアダムからノアまで十代である。[11]

このような事実に基いて，パスカルは創造と大洪水の真憑性を論じている。

(ロ) 次に，人々が先祖たちの物語を充分に知らないというのは，彼らが先祖たちと一緒に住んでいなかったり，彼らが道理をわきまえる年令に達する前に先祖たちが死んでしまっている場合である。然るに，旧約時代の人々は，(イ)で述べた如く長命であったから，先祖と共に生活し，共に語り合えたと云う。パスカルはこの事実も真憑性の根拠として挙げている。

(ハ) (ロ)の如く先祖たちと語り合ったとき，その話題は何であっただろうか。パスカルは云う。「そのとき，彼らには自分たちの先祖の物語よりほかに，何の話題があったであろうか。」[12] 彼らは，今日の我々の如く，学問，芸術，娯楽等の話題をもっていなかったであろう。話はいつも先祖たちの物語についてであっただろう。それ故，彼らは自分たちの系図の保存に特に心掛けたのは当然である，と彼は云う。

以上，パスカルは初めに挙げた(イ)〜(ハ)の事実に基いて立論している。この真憑性批評は今日の批評学では通用しないであろうが，ここに彼の方法の，実証的な，また，具体的な特色が見られると思う。

3° 2° と関連することであるが，パスカルは聖書によって聖書の意味を定めている。彼は云う。「聖書の意味を示そうとして，その意味を聖書から汲みとらない人は，聖書の敵である。」[13] ラフュマ版の501番の冒頭に次の一節がある。「ひとたび，この神秘が開かれると，その神秘を見ないでいることはできない。」[14] 「この神秘」とは何であろうか。後に続く，ラフュマ版502番では，キリストが真の犠牲であることが記述されているが，「この神秘」とは，このキリストの真の犠牲を示しているのであろう。これを念頭において旧約聖書を読むようパスカルはすすめる。そうすると，旧約の述べる意味が明らかになってくると云う。ユダヤ人たちが神殿で捧げていた小羊が真の犠牲であったかどうか，カナンの地が真の安息地であったかどうか，等が知られると云うのである。彼によれば，これらは象徴であった。このように新約が旧約の意味を定めている。即ち，聖書によって聖書の意味を定めているのである。

2）論理的であること

1）において，パスカルの聖書解釈が「実証的であること」，即ち，事実に基いて論じていることを指摘したが，次に，この事実と事実の結びつきが極めて論理的であることを指摘したい。

例えば，第23章『イエス・キリストの証拠』[15] をとりあげてみよう。ここでは，パスカルはイエスがキリスト（救い主）であることを示すために多種多様の証拠を挙げている。その一つがマホメットとの比較である。「誰でもマホメットのしたことをすることができる。ぜなら彼は少しも奇蹟をおこなわなかった。また予言もせられなかった。誰もイエス・キリストのしたことはできない。」[16] ここでは，メシヤは奇蹟をおこない，予言されていることが前提となっている。然るに，マホメットは奇蹟をおこなわなかったし，また，予言されてもいなかった。故に，彼はメシヤではない。然し，イエスは奇蹟をおこなったし，また，予言されていた。故に，彼はメシヤである。上述の前提のもとに，奇蹟，予言の有無が理由となって，結論が導き出されている。簡潔ではあるが，明快な論理がある。

パスカルの聖書解釈において，上述のような論理的な箇所は随所に見出されるが，明快な論理の極致をなすのは，「三つの秩序」[17] であろう。この断章においてパスカルは，身体，精神，愛の三つの秩序があり，最後の愛の秩序が超自然的であることを示す。長い断章であるので概略だけを調べてみよう。15のパラグラフがあるので，便宜上，符号をつける。

A．類の異る三つの秩序が存在し，そのうち，

愛の秩序が超自然的であることを示そうとする。

1．「身体から精神の限りない距離は，精神から愛への限りなく限りない距離を表徴する。なぜなら，愛は自然を超えたものである。」(18)

2．身体の秩序の偉大さは精神の秩序の人々には価値がない。

3．精神の秩序の偉大さは，身体の秩序の人々には見えない。

4．愛の秩序の偉大さは，精神の秩序の人々，身体の秩序の人々には見えない。

B．精神の秩序に属する人々，及び，愛の秩序に属する人々に必要な偉大さと，夫々の秩序の具体的な人物，即ち，アルキメデスとイエス・キリストを例に挙げる。

5．精神の秩序に属する天才たちは身体の偉大さを必要とせず，精神の偉大さで充分である。

6．愛の秩序に属する聖徒たちは身体の偉大さも，精神の偉大さをも必要とせず，神の偉大さで充分である。

7．5の偉大な天才たちの一人，アルキメデスは精神の秩序に属する人々に輝きを示した。

8．6の聖徒たちの頭であるイエス・キリストは神の秩序のうちにいる。彼は愛の秩序に属する人々には驚くべき輝きを示した。

9．アルキメデスにとっては，身体の秩序に属する王の模倣をすることは無用である。

10．イエスにとっては，この世の王の輝きを伴って来臨することは無用である。

C．イエスの謙卑，及び，愛の秩序の偉大さ。

11．来臨したときイエスがもっていた謙卑をメシヤとしての彼の働きから考えてみると，その謙卑が如何に偉大であるかが知られよう。

12．然し，世の中には，身体の偉大さしか認めない人々，精神の偉大さしか認めない人々がある。彼らは更に高い秩序の偉大さがあることを知らない。

13．身体の秩序の事物は，精神の秩序の事物の最小のものにも値しない。

14．身体の秩序のすべてのもの，精神の秩序のすべてのものをもってしても，愛の秩序の最小のものにも値しない。

15．結論。すべての物体，すべての精神をもってしても，最小の愛の動きをすら得ることは不可能である。何故なら，愛は超自然的秩序に属するからである。

以上の如く，AからBへ，BからCへと明快な論理で結ばれており，身体の秩序よりも精神の秩序が上位にあり，精神の秩序よりも愛の秩序が上位にあって，しかも，この秩序が超自然的なものであることを示している。この明快な論理の展開は，数学者としてのパスカルの面目が表出されたものと云えよう。

3）福音的であること

『パンセ』後半の章句は鮮かにイエス・キリストに焦点を合わせている。第20章『ラビ文書の研究』(19) でさえ，メシヤに言及している。もともとこの章は，ラビ文書から引用して原罪が古くからあったことを例証しようとしているのであるが，原罪の豊富な例を挙げるだけにとどまってはいない。パスカルは原罪の豊富な例を示すことによって，まず，人間が罪人であることを認めさせ，ついで，罪からの救いがあることを示そうとする。「神は人間の善き本性を，悪しき本性から解放するであろう。」(20) また，ラビたちは「二人のメシヤ」，即ち，原罪から人間を救う天上的メシヤと，天上的メシヤの象徴として地上の敵からユダヤ民族を解放する地上的メシヤの存在を説いている。

ラビ文書でさえメシヤを説いているが，それでは旧約聖書はどうであろうか。旧約には文字的意味 sens littéral と霊的意味 sens spirituel の二つがある。霊的意味は文字的意味のもとにかくされているから，旧約は象徴 figure となる。「律法は象徴的なものであった。」(21) 次に，象徴された実体 figuré とは何か。それは，イエス・キリストの人格において到来する真理である。イエスの生涯と教えについては新約聖書が記している。かくして，旧約は象徴のうちに，イエス・キリストを予言し，新約はイエスについて記述する。従って，イエス・キリストは旧新約両書の中心に位置していると云える。「イエス・キリスト。二つの聖書は，旧約はその待望として，新約はその模範として，いずれも彼をその中心と見なしている。」(22)

それでは，旧新約両書の中心であるイエス・キ

リストは何のために来臨したか。イエスは人々の罪を贖うためにやってきたとパスカルは云う。イエスは彼の民を聖別して，神と和らがしめ，神の怒りをとき，罪から解放するため，自らを十字架上で犠牲にした。(23) このイエスを受入れるようパスカルは神を求める人々にすすめる。「私は彼らに幸福な音信を伝えよう。彼らのために一人の救い主がある。私は彼らをこの救い主にひき合わせよう。彼らのためにひとりの神があることを，彼らに示してやろう。」(24)

以上の如く，パスカルにとっては，旧約はイエスの来臨を予言し，新約はイエスの生涯と教えを記述し，イエスはメシヤとして来臨した。即ち，罪人の罪を贖うことが，イエスの目的であった。このように，イエスのメシヤとしての働きを聖書の記述に忠実に立脚しつつ，強調していることから，パスカルの聖書解釈が福音的であると云えよう。

×　　×　　×

パスカルはジャンセニスムを弁護して，『プロヴァンシアル』を書いた。また，ブーリエ師によれば，パスカルは良きカトリック教徒としてこの世を去ったと云われる。(25) 更に，儀式礼典についての彼の考えはカトリック的であり，世俗からの逃避はジャンセニスト的である。然し，聖書解釈に関しては，上述の特色から考えると，宗教改革者と同質の点が多く認められると思う。

1）の「実証的であること」の1° 原典によろうと努めたことに関して云えば，ユマニストたちがギリシャ語やヘブル語の研究をなしたことは，宗教改革の起った一要因であり，また，原典による解釈ということは聖書の絶対的権威を主張する改革者たちにとって必要欠くことのできないことであった。ルターやカルヴァンもギリシャ語，ヘブル語を研究し，原典によって解釈した。同様に，パスカルもできるだけ原典によっている。

2° の「聖書的事実を歴史的事実とみなし，それに基いて解釈する」という点は，宗教改革者たちの間にも充分認められる点であるが，例として挙げた聖書記事の真憑性批評は改革者たちの考え及ばなかったことであろう。スピノザ(26)やリシアル・シモン(27)がまだこのような問題を提出していない時に，パスカルは歴史的事実に基いて批評している。勿論，彼の批評は初歩的段階のものであるが，聖書批評学が一般におこなわれるようになったのが19世紀になってからのことを考え合せるならば，シュヴァリエがパスカルのこの点を称揚したように，「正に天才の一撃」(28) と云うべきであろう。

3° の「聖書によって聖書の意味を定める」ということは，聖書の絶対的権威を主張する改革者たちにとって当然の主張であろう。

3）の「福音的であること」も，改革者の立場に近いパスカルの一面を表わしていると思う。

以上のような点から見て，パスカルの聖書解釈は，ジャンセニスム，カトリシスムを超えて，むしろ，宗教改革者の聖書解釈に近いと考えられよう。

2．キリスト論—レルメの『パスカルと聖書』に関連して—

今日まで，パスカルの聖書解釈の研究に最も多くの頁をさいている著作は，レルメの『パスカルと聖書』であろう。この書は刊行されて以来，多くのパスカル研究家に影響を与え，参照されている。この書の第三部第一章が，『パスカルの聖書解釈』であり，レルメは聖書解釈を，原理的問題を取扱う herméneutique 即ち，「釈義学」と，それの実際への適用を論じる exégèse 即ち，「解釈法」とに分けている。

釈義学では，パスカルは文字的意味 sens littéral と霊的意味 sens spirituel, sens mystique の二つの意味が存在することを，一方では不信仰者に対して合理的に，他方では信仰者に対して神学的に確立しようとし，そしてこの二つの意味の基礎に「隠れたる神」の思想をおいている。文字的意味を解くには，1）聖書原典にさかのぼること，2）ユマニストたちの文献学的成果を利用すること，などの規則を設定し，霊的意味を解くにはキリストの解釈，又，それを頂点とする使徒，教父，教会の伝統的解釈によるべきことを述べている。解釈法では，実際的な事柄に釈義学を適用しているが，ここでは神学的方法と歴史的方法とによって，聖書解釈をすすめている。歴史的方法というのは，聖書の批判的解釈であって，レルメはこの意味の聖書解釈を，a）本文批評 Critique

textuelle, b）真憑性の批評 critique de provenance, c）誠実性と正確性の批評 critique de sincérité et exactitude に分け，パスカルが聖書批評学の祖と云われる，リシアル・シモンの先駆者であることを指摘している。

以上の点は，パスカル研究家によってしばしば注目されてきたところであるが，解釈法の神学的方法の中には，余り顧慮されていないと思われる点がある。それは，啓示の可能性，必然性，事実を確立してから，『パンセ』の断章を用いて，歴史における神の計画を一つの簡単な劇に仕組んでいる点である。レルメはこの劇を『歴史・神学劇』(le drame historico-théologique)[29]と呼んでいる。

この劇は三幕で，主役は神であり，人間は脇役である。この劇にはプロローグがついており，これは，原罪によってアダムが原初もっていた栄光から堕落し，彼と彼の後裔の人類が神から見捨てられる，かのエデンの園で行なわれる。

このプロローグは fr. 430 に基いている。即ち「神の知恵は云う。……われは汝を形づくった者であり，汝が何ものであるかを汝に教えることの出来る唯一の者である。然し，汝は今ではもはや，われが汝を形づくった時の状態にいない。われは人間を清く，汚れなく，完全なものとして創造した。われは人間を光と知恵によって満たした。われはわが栄光とわが驚異を人間に与えた。その時には，人間の眼は神の威容を見ることが出来た。その時には，人間は，彼を盲目にする暗黒のうちにも，彼を苦しめる死の運命や悲惨のうちにもいなかった。だが，人間はかかる大きな栄光を保つことが出来ないで，不遜におちいった。……現在では，人間は禽獣に似たものとなり，われから遠く離れ去っているので，創造主のおぼろげな光さえも，彼には残っていないくらいである。」

第一幕は，神がメシアを与えることを人類の祖に，続いて，イスラエルの族長に約束したこと，メシアの象徴，予言者たちのメシア予言，イスラエル人のメシア待望，というように展開される。即ち，『その原罪にもかかわらず，神は堕落した人類に救い主を与えることを約束した。』[30]これは fr. 644 に基いている。即ち，「人間の創造においては，アダムがその証人であり，女から生れるはずの救い主の約束の受託者であった。」[31]

『彼はその約束を族長たちにくり返した。』これは fr. 613, 616, 617, 644に基いている。即ち，そのうちの一つ，fr. 644では，「神はその選民の希望をかたくさせるために，いかなる時代においても，その希望の影像を彼らに見させ，彼らを救おうとする神の権能と意志について彼らが確信を失うことがないようにさせた」とある。

『神は旧約聖書の主要な登場人物のうちにメシアの象徴を与えている。』これは第10篇「象徴」[32]全体に基いており，ノアやアブラハムやダビデのうちに，来るべきメシアの象徴が与えられているということである。例えば，fr. 613では「彼（ノア）は彼自身がその象徴であったメシアを待ち望むことによって，……」と記されている。『神は予言者たちにメシアを予言させる。』これは第11篇「予言」[33]全体に基いている。例えば，fr. 706には，「神は千六百年の長きにわたって予言者たちを励まし，ついで，その後の四百年間に，それらすべての予言を，その伝達者であるユダヤ人と共に，世界のあらゆる場所に分散させたのである。」とある。

『すべてのイスラエル人は約束されたメシアを待ち望む。』これは fr. 616, 617, 619 に基いている。fr. 619には「彼らはこの偉大な出来事の先駆者となり告知者となるために，また彼らと共にこの主を待望するようにすべての民族に対して呼びかけるために，特に形成されたものである。」とある。

第二幕は，キリストの来臨，メシア予言の実現，彼の使命を奇蹟によって立証，十字架上での贖罪，教会がキリストの業を継承する，という如く展開される。即ち，

『キリストが現われる。』これは fr. 670, 770に基いている。fr. 670には「世界がこのような肉的な誤謬のなかで年老いたとき，イエス・キリストは予言された時期に来臨した」と記されている。

『キリストは彼の人格と生活においてメシア予言を実現する。』これは fr. 730, 766 に基いている。fr. 730には「……（そのとき），彼（メシア）はユダヤ人および異邦人の王となるであろう。そして，このユダヤ人および異邦人の王は，いずれの側からもしいたげられ，死をたくらまれる

が，両方の支配者である彼は，モーセ崇拝を，その中心地であったエルサレムにおいて破壊し，そこを彼の最初の教会たらしめると共に，他方，偶像崇拝を，その中心地であったローマにおいて破壊し，そこを彼の主要な教会たらしめるであろう」と書いている。

『キリストは奇蹟を行なうことにより，その使命を立証する。』これは fr. 808, 838 に基いている。fr. 808には「イエス・キリストは，自分がメシアであることを立証した。然し，一度も自分の教説を聖書や予言に基いて立証したことはなく，つねに自分の奇蹟によって立証した」とある。

『キリストは罪人を贖うため十字架上で死ぬ。』これは fr. 774 に基いている。即ち，「イエス・キリストは万人のために十字架の犠牲をささげた。」

『キリストの建てた教会は世の終りまで贖罪の業を継承する。』これは fr. 870 に基いている。即ち，「神は教会をよそにして罪を赦すことを欲しなかった。教会が罪にかかわりをもつと同様に，教会が赦しにかかわりをもつことを，神は欲する」とある。

第三幕は次の如く展開される。

『全世界の人々が神の計画の正当なることを認める終末の時に至って，キリストの第二の来臨がなされる。』これは fr. 678 に基いている。即ち，「二つの来臨がある。その一つは，高ぶった人をへりくだらせるための悲惨な来臨であり，他の一つは，へりくだった人を高めるための栄光の来臨である。」

以上の如く，レルメは『パンセ』の断章によって，神の救いの計画を構成し，それを劇にしている。レルメは神を主役としているが，この劇を通観してみると，主役はむしろ，キリストであり，神は作者兼演出家とでも云うべきであろう。神はレルメも云っているように，この劇を書き，『その特別な摂理によって，自由を侵害することなく，人々や諸国民を監督し，あらゆる事件を導いている』(34) からである。キリストは第一幕では姿こそ現わさないが，それでも常に待望の的であり，第二幕では，この世に来臨して贖罪の業をなし，第三幕では審判のために第二の来臨をなすという如く，最も重要な役割を演じ，この劇の中心となっている。このようにみてくると，この劇はキリストを中心にした人類救済史を示していると云えよう。レルメはこのような救済史の原理を同書の Livre Ⅲ^{e} Chapitre Ⅲ. *Les arguments apologétiques* において展開している。そこでは，キリストが救済史の中心に位置し，象徴と予言はキリスト来臨の準備をなし，奇蹟はキリストの神性を示すことが述べられている。

『パンセ』にこのような救済史的意図のあることは，エチエンヌ・ペリエも *Préface de Port-Royal* (35) で証言している。ペリエによれば，『パンセ』の後半部において，パスカルはまず読者の眼をユダヤ民族に向けさせ，そこに独自の書物，即ち，聖書があることに注目させる。旧約聖書の中には，創造主である神がおり，この神が人間と自然を創造したこと，人間は創造された時の栄光の状態から堕落して罪におちいったこと，この罪から人類を救うため，神はメシアを与えることをユダヤ民族に約束されたこと，神は人類のために一人のメシアを送り，このメシアは人類に代って贖いをなすであろうと予言されたこと，又，新約聖書では，メシアはイエスにおいて来臨し，彼の人格，奇蹟，教え，生涯の事情が記されている。これらのことから，人類救済の業が成就されたことを知らせようとしている。ペリエは次のようにさえ云っている。「結局，パスカルは，福音書そのものについて，福音書の著者たちの文体について，彼らの人格について，特に使徒たちについて，彼らの文書について驚くほど多数の奇蹟について，殉教者たちについて，聖徒たちについて要するに，キリスト教が完全に成立するまでに経てきたすべての道程について，きわめてすぐれた考察をくだすことによって，福音の歴史の真理に役立ちうるものは何ひとつ忘れなかった。」(36)

ペリエが証言し，レルメが指摘しているパスカルのこの救済史は全くキリスト教的歴史観であるが，パスカルは特にユダヤ教の歴史観を意識して，救済史の理論を展開している。ユダヤ教においては，メシアの来臨と終末とは同じ時に起るが，パスカルはメシアの来臨は創造と終末との間でイエス・キリストにおいて実現するとしている。

このように，キリスト教の歴史観とユダヤ教の

それとが異ることを示した後，パスカルはこの救済史が一般世界史の目的であることを示している。[37] レメルは『歴史・神学劇』を示した後，次の如く云っている。「ボシュエよりも以前に，パスカルは，キリスト教固有の性格があらゆる時代を通じて連続して存在し，未開時代から文明時代に至るまで，ダリウスからヘロデに至るまで，一般世界史は何の力もなく，神の摂理によってキリスト教の勝利のために協力させられてきた。かくして神はすべてのことを見通し，超越的な力によってすべてのことを導き，人類は知らず知らずのうちに，摂理によって神の最高目的に協力している。」[38] この言葉は聖書の歴史である救済史と一般世界史との関係に関するパスカルの考えを端的に表わしている。人類は知らず知らずのうちに神の目的に協力させられているのであるから，一般世界史は聖書の歴史と別個の次元のものではなくて，その中に編入させられているような歴史である。パスカルは fr. 556 で，「世界は，イエス・キリストのために，イエス・キリストによってのみ存在し，人間にその堕落とその贖いを教えるためにのみ存在しているのあるから，すべてのものは，この二つの真理の証拠としてこの世界に現われているのである」と云っている。

『パンセ』における人類救済史と一般世界史との関係に関する，パスカルのこのような考え方は，イエス・キリストを中心とした救済史の理論と共に，基本的な点において，「救済史神学」のそれであることは興味深いことと思う。この神学の歴史は極めて古いが，特に，1948年，オスカー・クルマンの『キリストと時』[39] が出版されて以来，注目をあびてきた。キリストを中心とした救済史は，主として，Deuxième partie, *Le caractére temporellement unique des différentes époques du salut* で，救済史と一般世界史との関係は，Troisième partie, *L'histoire du salut et l'histoire universelle* において展開されている。「救済史神学」という言葉は用いていないが，このような考え方がパスカルの『パンセ』にもあることを，1931年に刊行された『パスカルと聖書』において，レルメが我々に示唆を与えてくれていることを指摘したいと思う。

×　　×　　×

以上，パスカルの聖書解釈とキリスト論を『パンセ』の断章に基いて述べてきたが，パスカルは，これらの問題をただ単に，神学的問題として取扱ってはいないことに注目しなければならない。ヴィネはこの点を指摘して，「人間として，神学研究をした人こそ，パスカルであった。」そして，彼の神学は「頭の中でのそれではなく，心情におけるものであった。」[40] 心情による聖書解釈，キリスト論の展開こそ，『パンセ』というキリスト教弁証論の中心的思想であり，鍵である。この点を，森有正氏は適確に，次のように指摘されている。「パスカルによれば聖書解釈は聖書に規定されるものであって，内容的にはキリストの解釈が聖書解釈を規定するのである。しかも，キリストの解釈はかれの無比の人格に関するかれの自己解釈であるが故に，我々はここでキリストとの関係の問題に逢着するのである。キリストと愛の関係に入り，キリストを受け入れる時，我々は正しい聖書解釈を現実に行っているのである。回心を目ざす聖書解釈が回心によってはじめて可能になるパラドックスである。」[41] と述べ，「聖書解釈は心情の，聖書の要求による準備とイエス・キリストの呼びかけとが愛によって結合されるところに成立する真の直観を見出す創造的アクトである。」[42]

聖書解釈とキリスト論に関する，パスカルの神学思想は，心情の信仰によった，換言すれば，聖霊の活動と真の祈りに支えられた主体的信仰の表現である。

註1）B．ウイレー著，深瀬基寛訳『十七世紀の思想的風土』（創文社刊）p.69　参照。

2）Blaise Pascal (1623—1661)

3）*Pensées* のテキストとしては，Blaise Pascal, *Pensées et Opuscules* (Brunschvicg, Hachette), *Oeuvres Complétes*. 14 vol. (Brunschvicg, Boutroux, Hachette), *Pensées* (Lafuma. Delmas)，パスカル全集，第三巻（人文書院）を使用した。*Penséer* の番号は，便宜上，Brunschvicg 版により，例えば，fr. 430と記した。

4）Cf. J. Lhermet, *Pascal et la Bible*, Paris, 1931. p. p.

5）*Pensées* (Lafuma) の Section Ⅰ. 22° *Preuves*

de Moïse. この Lafuma 版の Section Ⅰの章の分類は『第一写本』に基いている。

6) Cf. fr. 624.

7) Cf. fr. 626.

8) Cf. fr. 626.

9) fr. 625.

10) 創世記5章

11) Havet は次の如く計算したと，Brunschvicg は述べている。≪Dans la généalogie des patriarches, depuis Adam Jusqu'à Jacob, on trouve vingt-deux générations en 2315 ans ; et si on prend la vie entière de chaque patriarche, cinq vies au bout l'une de l'autre remplissent toute cette étendue.≫*Oeuvres Complétes* XⅣ, p. p. 66～67.

12) fr. 626.

13) fr. 900.

14) fr. 680

15) *Pensées* (Lafuma), Section Ⅰ, 23° *Preuves de Jésus-Christ.*

16) fr. 600.

17) Les trois ordres. fr. 793.

18) fr. 793.

19) Op. cit. Section Ⅰ, 20° *Rabbinage.*

20) fr. 446.

21) fr. 647.

22) fr. 740.

23) cf. fr. 766.

24) fr. 692.

25) J. Mesnard : *Pascal, l'homme et l'oeuvre.* cf. p. p. 124—125.

26) Spinoza (1632—1677)は *Tractatus Theologico* (1670) (邦訳『神学・政治論』畠中尚志訳。岩波書店) を出版し，モーセがモーセ五書の著者でないことを立証しようとした。

27) Richard Simon は *Histoire Critique du Vieux Testament* (1685) を出版し，主としてモーセ五書の信憑性を論じた。

28) J. Chevalier はその著，*Pascal* において，次の如く述べている。≪poser le problème religieux dans les termes où le posait Pascal, prendre, ainsi qu'il le faisait, la religion comme un fait et lui appliquer la méthode historique pour en rechercher les titres surnaturels, c'étaient "un coup de génie"≫(p. p. 283～284)

29) J. Lhermet, op. cit, p. p. 416～417.

30) 『・・・』は le drame historico-théologique からの引用を示す。

31) fr. 644.

32) *Pensées* (Brunschvicg), X. *Les Figuratifs.*

33) Ibid., XI. *Le Prophéties.*

34) J. Lhermet, op. cit. p. 416.

35) *Oeuvres Complètes*, tome 12.

36) Ibid., tome 12, p. p. CLXXXⅣ—CLXXXⅦ.

37) Cf. fr. 700, 701.

38) J. Lhermet, op. cit. p. 417.

39) Oscar Cullmann ; *Chrit et le Temps*, Delachaux & Niestlé, 1948.

40) Alexandre Vinet : *Etude sur Pascal*, p. 220.

41) 森有正，『パスカル』(要書房) p. 178.

42) Ibid. p. p. 179～180.